



故日録

久馬



~ 5
2200
1



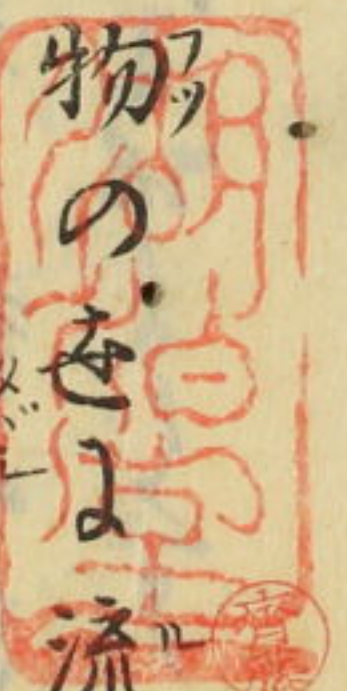
利5
2200

漫放日録を流布すに板本を改
訂す毎るに改訂すに板本を改
訂す毎るに改訂すに板本を改

明治四十一年四月廿四日
藤野 野 氏



連系此四季の景物の流布す所城
挙てこれとあるもの也但出所此詳あり
ざらにこれとあるもの也但出所此詳あり
中行事乃まづりごとくふん其季と
遊事のおほく作例乃なれたる用捨
のをも連系は先達のりといはれ
明弁を待而已大ら此事と見え
かりなり今爰は書のすうを只朝
あつた出所のあつた作例の
を誰くも耳あましく記す
も今更なるやうを其大率
て後学は蒙愚のそとに
あつたり但古人の糟粕を
流布す



外と餘所は乃るも人々何と多め
 ぬけし先を存心せしむるも何れぞ
 被むるの象のよしく今時り連哥師に
 まるはあひく其奥儀とてつるハ新式よか
 三事ハまらくあり一筋あらずと見せられた
 とて春とりのつきの成一方は秋おどろひく混
 乱也とまば流布此外の四時候つて定り候
 貴筑波山と吹らす風れよすがふたてり
 きこるるつりてせり爰は宗因法師云あつち
 を只昌程れ説を可守其家なれば不可る之
 云云是先師昌琢とてとて殊勝れをへ也
 因少く愚案りくP取ハ皆程へ相するの定
 取趣也ひとり爰ハ程れ説くつるも程ふ
 ころなる所とあらばゆきず外は流布乃

盤觴也とて小延寶四年六月十八日かんば扱
 とてつりつり扱れつとせりゆりハ大つと風
 とも扱れつに採りてつるもいふれつとつる
 く候ひおん候つるもいふれつとつるもいふ
 仍故と温て目よ何れつと録心とて温故
 時録と名成つるつる普通よもいふれつとつ
 乃るつるこれをつりつるもいふれつとつる
 をりれ水よも身魚れつり候つて候あつちの玉
 がつるもいふれつとつるもいふれつとつる
 つるもいふれつとつるもいふれつとつる
 とつるもいふれつとつるもいふれつとつる
 へてまらんよ其座の好士れ定りありて候
 候るもいふれつとつるもいふれつとつる
 異見よあらつる事下道のあらひとてつる

正月より三冬迄の公事とけり
めく萬代神佛 天象地儀人倫草木生類
器等よつるまで其季成るとりけ其外けり
よつれきつるものと十二月よつらて四季けり
るる氣運とめて心けりあつらとけり
アビ中作者よつり多し百韻よ可療事也
一々千句をよつらあつらとけり



温故日録卷第一目錄

睦月

三始 ミツノハジメ 月始 ツキノハジメ 三朝 ミツノアサ 改年 カヘトシ 迎年 ムカヒトシ 古年 コトシ 去年 キノトシ 新年 アタラシキトシ 立年 タチトシ 明立 アカリタチ

唱星 ウタヒシ 屠菰 トノコ 齒固 ハカタ 餅鏡 モチカガミ 冰様 ヒヨコ

腹赤贅 ハラカシ 國栖葵 クニノアザミ 初鳥 ハツトリ 筆試 ヒツシ

曆開 コヨミヒラカ 門松 カドノマツ 年越而 トシヲコエテ 初夢 ハツユメ

若水 ニギハヤヒ 包井廂 ツミ 凍解 コウゲ 冰隙 ヒヨク 冰消 ヒヨク 東風 コチ

藤野潔氏遺愛之記

若菜七種 菜摘菜摘 芥芥 薺薺 朝菜摘朝菜摘 蕙具蕙具 若

蕙菜摘蕙菜摘 子日遊子日遊 小松引小松引 卯杖卯杖 御杖御杖 外槌外槌

白馬節會白馬節會 人日人日 御齋會御齋會 踏歌踏歌 頭梓綿頭梓綿

縣召縣召 御薪御薪 賭弓賭弓 梅枝歌梅枝歌 青柳歌青柳歌 大芥歌大芥歌

雪解雪解 富士消富士消 沫消沫消 名殘名殘 消滴消滴 一滴一滴 消滴消滴 一滴一滴

消煙消煙 毛消毛消 落梅曲落梅曲 霞霞 結結 旁鶴旁鶴 細細 海海 色色 袖袖

霞霞 候候 霞霞 眉眉 水尾水尾 帶帶

長閑麗 水暖水暖 清水暖清水暖 掬清水暖掬清水暖 空暖空暖

温温 河廻河廻 佐保姫佐保姫 春宮春宮 霞洞霞洞

三冬盡三冬盡 來共來共 春加氣春加氣 春麻氣春麻氣

春花春花 梅梅 雪雪 曆曆 此壺此壺 松花松花 十廻花十廻花

柳柳 雪雪 青柳青柳 系系 髮髮 稻進稻進 水目水目 萌水陰萌水陰

松松 緑立松若緑 松若緑松若緑 松初緑松初緑 松若葉松若葉 初草初草 新草新草

萩若葉萩若葉 下萌下萌 霜雪霜雪 萱萱 薺蒿摘薺蒿摘

鷺 拈野ノ霜

百千鳥 鳥千声百聲

柳衣

温故日録卷第二

衣更着

釋奠 獻酢

春日祭 三多山神祭

率川祭

園 并韓神祭

大原野祭

初午

蠶

祈年祭

佛別 去佛 二月別

朧月夜 鐘朧 朧夜

蜻火燎

遊絲

藁

蘆角組 真薦萩為等

若草 草若緑 草若葉 若草 芳草

若紫

蕨 燒野

莖黑薄 燒野薄

萩燒原 萩下蒲

畑打 耕畑

畑燒 燒山 燒原

耕田 田打

苗代

水口祭

種蒔 種下

麻蒔

土筆

烏芋

水葱摘

椿花 椿咲散

紅梅 八重梅

待花 花燈 花催 初花

花火燈 花紐解

初櫻 獨揺櫻

系櫻 樺桜

歸鴈 鴈名錢 北行

厩結霞

鷺 渡

鳥巢

鳥古巢 鷓鴣卵

子規巢

鳥轉

顏鳥 良吉鳥

雲雀

雉子

狩場 鳥声音 狩場 声音 鳴

聞居鳥

朝狩 鳥狩

朝鷹 狩場 朝歸 宿狩 泊山

白尾鷹

鷹 繼尾

佐保姬鷹

蝶

蛙

櫻衣

温故日録卷第三

弥生

奉御燈北斗

曲水宴

宴會

巴字水

巳日後

須磨御秘

踏青

桃

南祭

来子

新桑摘

萍始生

鎮花祭

小弓響

遲日

永日

弥生山

夏近

夏を隣

待夏

春過而

春を隔る 春よあけや

花

波 瀧 雲 雪 吹 衣

袖 袂 染 裳之色 木 皿

籠 篋 机 瓶 席 心 心

詞 茂 姿 姿 顔 面 貌

侍 眉 注 友 都 園 聲花

祭 繪 夕 立 房 蔓 林

吉田祭

筑摩祭

三枝祭

神祭

齋刺

神取

和清

卯花朽

五月待

短夜

明安月

麥秋

麥秋風

麥一笛

牡丹

千代見草

名取草

杜若

葵

蓼

密

箏

卯花

瘦疏

若楓

若葉

紅葉

茂

野山

木下

青木立

常盤木落葉

郭公

四手田長

時鳥

蝙蝠

卯花衣

蟬羽衣

嬾葉

温故日録卷第五

五月

軟菖蒲

葺菖蒲

菖蒲

枕

藥玉

五月玉

騎射

藥日

競駢

粽

五月鏡

左右近馬場騎射

左近荒手結

右近荒手結

檉佩

賀茂競馬

五月雨

梅雨

花落栗

紫野今宮祭

蟬始鳴

水草花

萍花

花薦

薦刈

藻花

芟藻

和布川

水葱花

古奈伎我花

百合

紫陽草

四比良花

未摘花

紅未咲花

早苗

田歌

田植

田草取引

忘草花

初瓜

若竹

竹若葉 今年生竹

竹若緑

橘

拒花

荆棘花

棟雲見草

青梅

膿梅

水雞

水鳥巢

鴨子

鳥替毛

羽脱鳥

鶉河

夜川

鶉飼

鮎

魚梁

螢

蚊

蠶鹽

鹿子

獸狩

火串刺

照射

袴衣

温故日録卷第六

水無月

林鐘

氷室

氷膳物

醴酒

月次祭

祇園會

祇園臨時祭

暑日

石踏茂暑川原

温故目録

夕立 夕立多 結稻妻 蛸 蛸 節折 ヨリ 河社 カサ 雲峯

御萩 御萩 大萩 大萩 川萩 川萩 茅輪 茅輪 名越萩 名越萩 形代萩 形代萩 小蠅成神 小蠅成神 薰風

凉 凉と云詞清事云云 露 露 網代 網代 鴛鴨 鴛鴨 月 月 泉 泉 殿 殿 佐良之井

清水掬 清水掬 清水用 清水用 扇 扇 喻月 喻月 簞汗 簞汗 來奴秋 來奴秋 待 待

秋隣 秋近 秋遠 秋遠 夏果 夏果 瞿麥 瞿麥 石竹 石竹 夕顔 夕顔 瓢花 瓢花 瓜

麻櫻 麻櫻 玉卷葛 玉卷葛 射干 射干 藍川 藍川 藍藍 藍藍 蓮 蓮 腐草為螢 腐草為螢

海松 海松 菱花 菱花 澤瀉 澤瀉 蟬 蟬 時雨 時雨 腐草為螢

練雲雀 練雲雀 火取虫 火取虫 鶴鷓鷹 鶴鷓鷹

温故目録卷第七

文月

初凉 初凉 殘暑 殘暑 身入 身入 移香 移香 冷 冷 風 風 扇置 扇置 弄

七夕 七夕 乾巧 乾巧 烏鵲寄羽 烏鵲寄羽 橋 橋 立庭 立庭 徹 徹 像 像 水 水 星 星 願 願 絲 絲 烏鵲 烏鵲 橋

年渡 年渡 秋去衣 秋去衣 星合 星合 星祭 星祭 星手 星手 向 向 星契 星契

妻送舟 妻送舟 玉祭 玉祭 玉佐可介祭 玉佐可介祭 相撲使 相撲使 相撲競 相撲競

品收目

新綿ニワタ 鶉坂祭 鶉坂杖 三佐山祭 御謝山狩ミサキヤ 穗屋作ホヤ

初嵐 露波 思心 胸心 詞泪 稻妻 律調リチ

霧結 蝶虫 柳胸 立人 香 稻妻

一葉散 船落 衣落 桐落 柳散名木散

黄柳 楸散 柞散 櫨散 女郎花 牽牛花

露草月草 鷄冠草花 男郎花 桔梗 萩濱 伊勢濱一

芭蕉結 霜 水懸草 早田室 早速稻 鳩吹

鳥屋出鷹 初鳥狩 初鷹 蛸結 蟬 虫 鈴虫

松虫声 美貞 蚕綴 蝨蝨 促織幡 織虫 繡虫

藻住虫音 鳴聲 蓑虫音 鳴聲

温故日録卷第八

葉月

北野祭 司召 放生會

名月弓 絃月 日影 月眉 眉書夕 月日 雉岳岳

温故目

一船

桂花

桂花

一兔

玉兔

一鼠

星一夜

盃光

一出塩

一都

一晶

一友

一主

袖

初塩

擣衣

駒牽

切原駒

甲斐駒牽

武藏駒牽

信濃望月駒牽

野分

武藏立野駒牽

上野駒牽

龍田姫

秋宮

宇治花園

蘭

草花

草初花

野花

薄

尾花

萩

鹿鳴草

一戸

芍萱

葛

花

紫花

紫色深

紫苑

鬼志許草

穗蓼

蓼花

蓼錦

葛

萱

萱之軒端

茅萱

草色付

色叢

粟刈

藍花

山藍花

櫻紅葉

守田

僧都

引田

田色

案山子

驚鹿

稻葉雲

稻穗波

落穂

小田

稲垣

稲稗

梅黄葉

鴈

初般

田面

一金

富草花

鷓鴣

稻負鳥

鷓鴣

鳴

鷓鴣

小鳥渡

朝鳥渡

鷲

小陵

鷓鴣

鷓鴣

斫木

小鷹

鷓鴣

兄鷓鴣

鷓鴣

鷓鴣

鷓鴣

鷓鴣

鷓鴣

雀鷓鴣

雀鷓鴣

鷓鴣

鷓鴣

雀鷓鴣

雀鷓鴣

鹿 カゼギ 紅葉鳥 カゼギ

杜父魚 カヂカ

澀鮎 ササガ

下鮎 ササガ

鱸釣 ササガ

鶉衣 チヌイ

忍摺

温故日録卷第九

長月

御灯 ゴトウ

野宮別

網代打

重陽宴 菊花宴

菊盃

煖酒

菊 シク

着綿 マタ

翁草

殘菊

例幣 ケ

住吉市

撰虫

後名月 二夜月

後今夜月

桂川御襖

露霜 露時雨

露霜寒

霖雨冷 シゲレ

時雨結霧

霧結霜

冷 サシ

鴛鴨ホニ冷と云 鴛鴨

露寒 朝寒

將寒 朝寒

漸寒 鶏皮

夜寒

長夜

冬近

待冬

秋過而 秋盡

秋盡 秋盡

秋果而 秋果

猶寒 秋余

秋余里後

枯野露 枯野

枯野結 枯野

山色野色 野山

野山錦 野山

野山紅 野山

裏枯 裏枯

薄散 薄散

尾花散 尾花

草枯花殘 尾花

尾花枯 尾花

野花殘 野花

薄穗 薄穗

枯萩穗 枯萩

忍草 忍草

蘆穗 芦穗

枯芦穗 枯芦

葎花 葎花

龍膽 龍膽

思草 思草

我毛香 我毛

晚稻 晚稻

穠 穠

霜刈田 霜刈

草駮 草駮

菊 菊

名木紅葉 名木

雞冠 雞冠

楓青 楓青

鷄頭樹 鷄頭

紅葉 モミチ 結時雨霜 結時雨霜 露乍散 露乍散 川 川 水 水 且散 且散

庵 庵 舟 舟 初 初 薄 薄 遲 遲 色葉 色葉

言葉色 言葉色 落葉色 落葉色 朽葉色 朽葉色 木葉色 木葉色 木葉紅 木葉紅

木葉錦 木葉錦 時雨 時雨 赤木葉 赤木葉 木々色 木々色 檀 檀 色替奴松 色替奴松

色替梢 色替梢 色取木々 色取木々 草木黃落 草木黃落 拍散 拍散 拍且散 拍且散 木實 木實

榘 榘 木葉且散 木葉且散 為且落葉 為且落葉 梨子 梨子 榘實 榘實 胡桃 胡桃

榘柴 榘柴 落栗 落栗 榘實 榘實 榘實 榘實 榘實 榘實 榘實 榘實

榘霜踏鹿 榘霜踏鹿 殘鴈 殘鴈 千鳥結雁 千鳥結雁 露露 露露 木枯渡鷹 木枯渡鷹

衣擣袖霜 衣擣袖霜 衾露 衾露 一重綿 一重綿 温故日録卷第十 温故日録卷第十

神無月 神無月 應鐘 應鐘 小春 小春 十月更衣 十月更衣 始水 始水 射場始 射場始 殘菊宴 殘菊宴

水枯 水枯 時雨 時雨 川音 川音 松風 松風 木葉 木葉 志卷 志卷

霜 霜 消 消 初 初 消 消 初雪 初雪 見 見 富士 富士

浮月 浮月 寒 寒 寒 寒 月寒 月寒 夜を寒 夜を寒 寒夜 寒夜 炭竈 炭竈 炭賣 炭賣

夜寒 夜寒 寒朝 寒朝 朝氣寒 朝氣寒 今朝寒 今朝寒 埋火 埋火 火桶 火桶 楯 楯 綿被 綿被 久太羅野 久太羅野 枯野 枯野

埋火 埋火 火桶 火桶 楯 楯 綿被 綿被 久太羅野 久太羅野 枯野 枯野

名草 枯枯生薄 枯葛葉

紅葉散紅葉散而物之流 紅葉散初紅葉散

木葉 月月一落 落葉 柳葉

名木枯 柳枯 凍柳

網代 冰魚刺 柴漬

温故日録卷第十一

霜月

狩使 豐御狩

鎮魂祭

新常會

豐明節會

豐御

小忌衣 大忌衣 山藍袖 山藍衣

日吉臨時祭 北祭

日蔭絲 日蔭鬘

神樂 里庭燎 折諸舉 杖篠 弓宮人

木綿志天 難波前張 階香取 井奈野

殖規 總角 大宮 湊田 蚤得 錢子 明星

酒殿歌 東遊求子 雲消 霰消

雪 花沫 標櫛 斑斑 雪吹 篠小雪風 彼

月月霜 下水 林 六花 凍蝶 水鳥 浮寝鳥

温故目

十三

冰 露 碎 残 月 薄氷 薄成行 露

紐鏡 鳩鳥 氷蠶 氷柱 垂氷 千鳥 月鳴

鴛 鴨 鷓村鳥 秋汝 鷓 都鳥

鷹 著 網懸 煖鳥

狩 教草 鳥落草 草取鷹 草取鳥 慕鳥 立鳥 鳥叫

温故日録卷第十二

師趨

唱佛名 被綿 追儼 年終玉祭 爲岡見 荷前

内侍所御神樂 年内立春 年木樵 衣配

曆未 曆卷果 曆卷返 春夕隣 春近 待春

守歳 年籠 年終 行年 年歸 流年 三冬盡

温故日録卷第十三

非季詞

葉守神 諏訪祭 駿河舞 梅宮 櫻宮 神事

鹿野苑 凉道 黄泉 法之爲介菜摘 宵月

心月 雷 西吹風 穴師吹 天浮橋 櫻雲

年花 方違 作田 野遊 清水 水烟

波花 瀧殿 桐壺 梨壺 橘都 志賀山越

藤原都 須磨霖雨 霞関 霞谷 柞森 柞山

木葉里 木葉沖 藤河 泉河 花山 櫻川

櫻井 櫻山 櫻谷 月林 月輪 星月夜

有明浦 有明山 月山 照月山 五月山

月里 月讀里 月讀杜 月讀宮 月讀神 月讀尊

雪山 雪消澤 雪白濱 雪高濱 雪氣山

野緑 野滋 稠山 蓬 葎 浅茅

壁生草 草生而 木賊 千種 蘿 花紅葉

松落葉 竹落葉 柏 指鹿云馬

猪狐 兔 颯 月毛駒 尾花蘆毛駒 熊月輪

新年 年立 明年 迎年 古年 去幸

去年コトシニシテシとけシをシも
春也今年コトシニシテシハシ雜也

唱星

朔日四方拜シ也シ四方拜シニシテシ元正の
寅の時シニシテシ属星シと唱へ天地四方山陵
を拜シ一ハシく年災シとシ拂シ以寶祚シと祈シと
於シ儀シとシや清凉殿シ東階シハシ砌シの外
ニ御屏風シとシ一シ御座三并シ
まシけ其前シニシテシ本代机シと置シて香花灯シ
とシハシ一シ殿上シ乃
侍臣シナシも四方拜シとハ志シをシくシやシハシ内裏シ仙洞
務閑大臣家シナシも外シハシ一シ事シハシ事シハシ事シ
和五年正月寅シハシ刻シ

天地四方属星山陵と拜シ一ハシ由宇多シ此御門シの
記シハシのせシとシ盤觴シハシとシ皇
極天皇雨シと祈シ於シ南シ河上シハシ事シと
四方城シ一シ雨シ五日シ一シ日
本紀シハシ是シとシ一シ日
其上属星城シ一シ災難シとシ趣天地瑞祥志シ
ハシ書シハシ一シ公事根源シ雨雪之時シ於シ弓場殿
有此事猶江次第シ委二条大内御所シ此年中ハシ
事シ哥合小云

すシハシ星シとシ一シ日
と詠シすシハシ當年シハシ本命星シと先シ七シ人シ
ことシハシ一シ日

屠蕪 白敬 藥子 是ハシ元三シ儀シナシりシ清殿シと
とシ主上シ畫御座シハシ生シ氣シ乃

方此沙衣とよれつ孫の沙を仰れ此とふかさひ免さふ
陪膳此典侍典藥頭も生氣の方此色を着す
此時先御厨子所此御齒固を供寸命婦茲人
俊送して典侍次第は表ぬまのりもてく新子とて
姉女此いまこ嫁せざばとてりて是城用事事と
屠獲ハ女見よりの心とふ本支りまは其為ハ女
女城撰てまののまじりなるこけ薬子鬼此間
くりすこてはけの几帳れとてんさぬふ女官
典藥城りて沙薬をりねと一献し先屠獲
を酒小入く菓子よれまじ次は銀器ハ入り薬
の頭よりていせん小はま主上座とてせ給て
夜御殿此南の戸より入給く御ねりあめり東
りかこれ戸よじくひくあせ給ハ陪膳御蓋城持て
まのりす是も屠獲を東此戸よ向てのじ由本支

このころや次ハ女官小返り給ハ是城後取より
きこのころや一日、四位二日ハ五位三日ハ六位此藏人
はとこのころハ日奉行此茲人交名をまきり専に
あつて殿とれすこれ柱よをすこさく二献し
神明白散を供とじりさくれ城後取のくは
事よ大根とて女茲人給りて麻小すく是
とて元日ハ人と精進のゆふなり江次第よん
三献し度療散城供と如此御藥此儀ハ三日
わり第三日ハ沙衣とやくをなる銀器ハ入り
金名指小分て御額并沙平此ははは
右此第四乃指とわりてはくは是ハ藥師此
桐あくはこや此菓子儀式ハ五十二代嵯峨天皇
弘仁年中はけり一人是とのぬまハ一
病あり一病小是とのぬまハ一里ハ病なりこ

かた功能は... 是と... 全事根源

異朝来由... 菴除夕遺... 酒樽名屠類飲之不瘦云

齒餅鏡

齒餅鏡 源氏初音... 齒餅元三の日の事也... 此哥は... 河海... 妻略... 此哥は

古今集よこれハ今とれ... 高土器... 高杯... 源氏... 後頼元日此哥云

のちとてとんとく。巨且が墓のよと生たる。初年
年れ始よ門よまると此事晴明が蓋蓋内傳小
あり委祇園會れ所よ可記是門松の縁也志
ハあれども一条冬良公れ御説よは松ハ千年をら
きり竹ハ万代成らるる物なり後ぞ年始れ祝事
よこまをそそゆるゆり一とく
畧記之げ説を仰きゆくと云

年越而

若水

立春日隨季拾芥抄 包井開若水 若水と云
事ハ去年御生氣れ方れ井を點して云と
て人よくせとて春立日主水司内裏よ奉ま
朝餉して是成さるるすあまれ春立日は
奉まは若水と云や奉まは邪氣成のくと

いふ本文ありは此文是を供する江帥匡房卿れ
次第よ若水成のひ時呪をとなる事ありとみ
えと云り公事根源是と云り井はくくもつあり
是立春日事也連哥よえ日といつる人あまとも
之袖中抄よも云

うらなひききふら春れらあまの井よひすひと
つらふは立春の日よりけこのおやきたる水と
いふ也案内志ぬ人ハ元日よとてまつるうらやひ事
質茂れ海ありとよと朔日ふちるもつらと申
ありと後ハ立雲ふなすくとくくはP事なり
堀河院の御時よ立春れ朝よ御前よて今日れ心
とよめと宜有ありききは後頼朝臣のり
十載第十八
以上是顯昭れ説もかとのとあり又寶治二年百

御形 須須之呂 佛座なり也正月七日小七
種此菜蓋天と食らるれ其人萬病なり又邪氣
城のそと術よはくるとるくそり 公事根源 拾芥抄
十二種 若菜ハ 若菜 菌 藟 蕨 薺 葵
蓬 水蓼 水雲 菘 芥 あり七種ハ前
こ同ひ青ハかふかと拾芥抄より又青とより
よ是今爰小書ハ皆連哥より打まきて春小
旅よりあるん註よ記之ヲ事也其外を書付て毎
こころのやうさもらぬ其季は四時よりたれ
— 他准之若菜ありハ抄よりはひ又よりたれ
こ摘正月上子日又正月七是れハ 八雲 正月七日
教のどんよりわらふとす(或)や奇ありん七日
此後小もおほくよりり連哥より平句より七日事
よさくぬも又あり — 新式抄 或抄小

古今事類
長江のつれ流まんこころのどらりよはたはまもいぬ
かのこころの報の奇くも但世奇ハ引分よなるに欲
は奇ハ紙注云つれどつこころの時を言たるはた
とことなきるをこころよ今たまこころのたまた
まこころ也心いこころ光陰のやなきこころのたまた

若菜 馳 カリ かつらとるるとし
しる事也 藻塩草
菜摘 為春 新式菜

磯菜摘 磯菜とるりハ難也 海菜と云つハ春也
朝菜と摘

惠具若立 エハノワカタチ 蕙菜摘 エグ 若菜 若らたぬ山田はは惠具にひと
名ぐそは女萎とまてゑことありとこと同草なり
たすつりよさく草れ水辺小らるく或ハ名くとハ芥と
云と云候あまこと此よハ芥れ小別よ名くとあま

時は獻すまはらへしり精魁をい非 此をい非 此をい非
もおふ一状作物所細流云金銀細一六 明なる一

白馬節會

七日 此節會はまゝ、八方、元日なりとあり
おふ一元日ハ水代横し、かの 賀部 曆あり

わふふうてしるる諸司ハ妻こいふうやを
兵部省より奉る御野養し、ウ注内、兵も養用
す、ウ注内、兵も養用、諸司、養と云へし
卯杖ハ養あり、たしとて、
候哉と仰す天皇ハ財多羅集、其長七尺五寸
なり、ウ注内、七尺五寸、
トハ、白馬の節會とあり、いと、青馬濃節會
とて、トハ、其れハ馬ハ陽也、青ハ春ハ色也、是り
より、正月七日ハ青馬と、ハ、年中ハ邪氣との
そ、このふまを、た、仁明の御、ハ、養和元年正月ハ

豊樂院小おより、青馬と見給同ハ、正
月ハ、此紫震殿、ハ、清也、ハ、此馬ハ、
記ハ、春を、東、ハ、む、青馬七正、ハ、
七ハ、小陽の敷正月ハ、小陽ハ、月也、又十節記、ハ、白馬
を馬ハ、性ハ、本ハ、天ハ、白龍有地ハ、白馬、
勝ハ、勝也、地ハ、勝ハ、馬ハ、ハ、の勝ハ、龜ハ、
文ハ、勝、ハ、今ハ、節會ハ、三七、ハ、正、
是ハ、三ハ、三、ハ、ハ、七、ハ、
平ハ、御記ハ、ハ、今ハ、ハ、
皆ハ、ハ、ハ、是ハ、白馬、
ハ、ハ、ハ、ハ、
すハ、不、ハ、ハ、
七日ハ、御門ハ、小、ハ、殿ハ、ハ、
是ハ、ハ、ハ、ハ、
公事ハ、ハ、

のつかさどるべきハ先達ノ不習してハ輒に心む事
ならんや然ハとして後昆^ミも世に於て^シ所々捨事な
くれ式日ハ十一日より始て十三日^ニ至りて三ケ日なり景
行天皇代御宇武内宿祢と棟梁の臣^ニあるは
是官職の^ハ一ウシ孝徳天皇大化五年ハ八省百
官と被定それより^ハ大^臣大^連など^ハ号あり
き文武天皇大寶^ノ淡海公不比等^ハ勅ありて
律令^ヲ定官位位階^ノ事とのせり^ハ其後
おほくのそむく官も^ハ又^ハそら^ハ職^ニと^ハ是
令外^ハ此官とハ^ハや但内大臣中納言^ハ大宝^ノ
以前^ハより^ハ号^ハ共官位令^ハその^ハ
す定て故ある事^ハあり^ハ京^ノ官除目^トハ^ハ京
より^ハ諸司と肯と被任^ハ是ハ井中^ノの人^ハ友と^ハ
公事^ノ根源^ト除目^トハ^ハ此官と^ハ除去^テ新^ニ昇^ル進

する義也ぢ^ハ此音^ヲなれ^ルも下^ニ略^シてぢり^ク

新兼 以^テ此^ノ名^ヲ目^トと^ハ辨^リ引^キ救^フ

踏歌

十四日^ノ夜也 頭^ハ梓^ノ綿 踏^キ哥^トと^ハ正月^ノ十

四日^ハ男^ノ踏^キ歌^ノ事^トなり^ハ傳^ハり^ハを^ハ此^ノ事^トなり^ハハ
女^ノ踏^キ哥^也それ^ハ十六日^{ナリ}光源氏^ハ此^ノ物^ノ語^トなり^ハ
も^ハお^ハひ^クハ^ハお^ハと^ハ踏^キ哥^ハ此^ノ事^トなり^ハ傳^ハり^ハや^ハ大^ニ正
月^ノ十四日^ハ十六日^ハ八月^ノの^ハは^ハわ^ハる^ハこと^ハ京^中ハ^ハ男^女此^ノ事^ト
物^トなり^ハは^ハ此^ノ事^トなり^ハは^ハ年^ノ始^ニ祝^詞と^ハなり^ハて^ハ此^ノ
武^ノ天皇^三年^ノ正月^ハ大^ノ極^ノ殿^ハ渡^ノ御^{ナリ}なり^ハて^ハ男^女
の^ハ事^トなり^ハハ^ハ夜^ノ踏^キ哥^ノ事^トなり^ハて^ハ又^ハ然^ハハ^ハ月^ノ
の^ハ比^ハる^ハ祢^トも^ハ鳥^ノ羽^玉此^ノ圖^ノの^ハ和^ハも^ハなり^ハや^ハ持^テ祢^天
皇^代御^時ハ^ハ漢^人踏^キ歌^トなり^ハて^ハ唐人^ノ踏^キ哥^也

皇代御時ハ漢人踏歌と也

唐人踏哥也

らぐ〜秋よ〜ゆり万葉第一目

秋の田代あふ〜まきあふおき〜流れた〜たつるをまん
といり夏もいつ〜同志つるぬるぬる〜一〜後成
いり七夕よ〜霞〜川と〜ゆり〜八雲御抄よ〜ゆり
其哥万葉才八〜ゆり只霞よ〜勢をむすひ〜ハ霞
り〜流れ〜美よ〜ゆりて春也と〜ゆりゆり〜ゆり

かすひる〜詞 非霞字 但詞のゆきをや〜ふて〜嫌
御物 秋霞乃心よ可用者春の季

とりつ〜也 新式 かすひると云詞 春よた〜すや
い〜も〜宵柏のゆ〜い〜ゆり〜すひ〜んあ〜ま〜れゆか

まはかや〜れ詞ハ女ゆり〜ゆりハ〜れ季よある也他准之
流布 べい〜物ゆひかすひ〜んとあるハ幾又重とゆ〜てゆ

〜ゆり〜春よ用ら〜〜是新式ハ文言よ〜相か
ゆひゆりかや〜ゆり〜文と〜さ〜ゆりゆりゆりゆり

こ〜掠れ字た〜ハ抄ゆひ〜も〜ハす春〜も〜
と知〜一〜言抄よ文〜書かすひるも春〜とあき
〜家ハ新式の上よた〜但當時用る所 言
抄の〜と〜ゆり新式抄物 春の季ハ時ハ御
〜折越嫌也春の季あ〜も霞の字ハ〜可
嫌也云云又同抄ハ何〜ゆり〜て〜か〜
ハ春也とあり當流か〜と〜も〜ゆりゆりゆり
〜注〜ゆり時ハ宗匠よ〜ゆり

〜千〜ゆり
〜も春た〜ゆり
〜網 非水邊 新式 かすひの
あ〜は似〜云事也

〜海 非水邊 同
〜色
〜衣 衣字ニ可隔ニ七
向但不可レ爲

衣類
新式
〜袖 涙 のかすひ〜も春也
〜眉

水尾

えこれすもわくるさ水尾にて
海はたなとろく霧かたともよめり

一帯

ま木ニ小侍従

春くれ禁のころは霞にや帯は足ひきき吉徳乃中

長閑

三月

麗

是ものころゆる事之長閑は折端なり
和日とも春うらけとむなとつ詞

のこしてすくすくといり流布

水暖

清水暖 びす清水のぬらむなとも春なり去辛

り夏すーかりー清水のけ春ぬらむと云事也

貫之神ひらてびとひらたれとよめる昇心してあふ

空ゆるび風暖かとも春也 惠慶法師家集

あきらすると謝乃海夫人誇ら浦風ぬらむかすきたたひく

新千載なる河て入らま木ニ南枝暖待鶴とふと

河大宰大戴 高遠郷よりる序

凡ゆる梅のころ花咲ぬきハいつハ宿れとひとれと

新撰六帖は日けとめとかなともよめり

温

三月よととるあつても春也 新式は日れあつても

ハ可為春云え只あつても春也 流布

只あつても春也 新式は日れあつても

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

春と定りたる物也 春と定りたる物也

梅

但八雲よ夏さきことせしむるはよるよる愚管見
 ひんぐん重てしぬべし朝さきも哥よあふぶかし
 或書よは是萬葉第三長哥又同第十五長哥に
 ハ冬木よりさきものなれハ勿論初春也されども深山を
 とよハ二月までしぬるやうにするは此ハ大發句帳
 宗祇の夜ちよ春ちよは冬の梅さき深山か那
 深ハ寒故よ冬木此様よびく暖たり梅よ雪成
 じすし
 壺
 梅壺梅ハ西ハ白梅東ハ紅之由有清少納言記云
 在飛香吉北 順和名 一説梅はが雜也といふも非也
 春也藤はが此所よ委可記之
 曆 或書梅衆木前花發故号木花云云
 梅と諸木れ先よこつて梅曆といふなり

奥儀抄

或ハ梅のさき成るは春此來と云ふ心也梅是
 山家曆と有大發句帳 春さきしてひくハ梅の曆が
 此花 こつり木の花と云説さ異説也為家此明疑按
 もい説さいつ 宗祇古今抄

柳

よ雪成じすひくも春也
 未のまきまてしするのま

青柳

柳 是ハ
 水乃

うこふある柳れ枝のいゆれひり
 よ似さくハ雲 稻庭の前よ委可記

柳絮

揚花 も亦同訓柳の
 眉ハ人の目よ似たり

系

系よ 系よ 髪

松花

十迴花 初春よる物也 流布 松ハ千年よ
 十度花用と也 百年はく十返あり

松緑立

松緑ハ雜也 緑立 松初緑 松若葉 御
 若緑ハ春也 新式

松若葉

十一日、御連哥よ生とふやせむ葉のなほひ松 昌陸

若松 松緑各春 松緑添 も春こへり或書云 新式抄物よこと

こまふとてゆ春とあれと道理あらんみたりとふこ
云ハ只緑の色れしく成とふ也立とふハ何とて
んをり此か生する事也各別の事也不可信用云
云好所よとふ一或秋但昌程ハ春也といり

天月 月とあつてふたりこめたるるを
よりりわくひとてふたり

萌木陰 三智抄ハ春此部ハ入源氏若菜トよ色くの
いととれとる花の本もよりぬるしきのけり
云云 同抄云とえきれけり葉のこさささるるゆ也
漆抄云萌木ハも陰なる木陰ハ藻塩草云とえ
木のうげハあそこらと云々 説々志き一為頼家集

是れよりけり家のとえ本とて

おひめなる庭れとえそのころよそとあふ洞とて
是ハ新樹の芽也木の下圃ハ夏なるゆへなれハ春の詞
たててとえとてよりて春ののする哥ハ代集未見
後兼春上
とてとる本れ成んとも採を多く枯れ枝のまをさるる
かやうよとある芽たてハおり一仍尋其義只も春云

初草 新草 ところりもより春也
小わりの草とわりの

萩若葉 宗碩、藻塩草ニ云 是ハ取分正月也

下萌 植物よ新越垣 新式 或ハ説二月こへり但月令
草木萌動 雨水節ノ未也霜雪乃下りても春
豊 俗用、莖立二字ハ蔓菁苗也 順倭名 拾遺ハ物
名よよりり万葉丈本等よ物若るてもよりり

薺蒿ハギ摘ツミ

萬葉第十よ。去月好人をかりたる百ととゆ。春野の萹茅ハギ子孫ハギ有る

蘇月ハギ上高ハギ七卷食經云蘇月ハギ芥木一名ハ菰ハギ蒿ハギ菰ハギ音ハギ蘇ハギ和

崔鳥ハギ錫ハギ食經云狀似ハギ艾草ハギ而香ハギ作ハギ羹ハギ食ハギ之

里人やおぼれはひく三益山春日此りのまのうらふ

新撰六帖衣笠内大臣哥也同集信實哥云

今日ハまゝに書かれおりたつてせめておぼれは葉れ給やとて

此外新撰六帖末本およぶるおぼ

照鳥

未れ春まて
も用るゝや

枯野霜

かこよそ 春ウケヒをヒ子ヒとヒ
すひくハ春也 流布

百千鳥

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて
もまゝ 五言抄 於御城正月十一日御嘉例の

御連歌の第三 終るは百千鳥の春を立て 昌純

或抄よりちれをとりひくハ春よなるハかたけと云

但春ウケヒなり

古今春上

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

頭昭云ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

あまことそれいづくとおり白萬葉集哥云

別して書かれ名とすすはあはれ別の物とす

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

ちちれをとりひくハ春也をれ千声百声うて

こしてなしく又鶯と百舌鳥と云ふ二の鳥なりともいふ也
此書より小鶯ともしひもあつて此鳥ともいひくこと後
らぬくらひ一鶯といひするにそりかなり一世名物よこ
つてゐるにふと鶯といふはたゞさきこれとて思
一してれをさつといふことゆき以上袖中 畧記之ハ雲
御抄ニ鶯の部に入注云、是ハ鶯ヨカキクハ是春
百千鳥之轉也但鶯ノ詠有例云云或説はいつるも
百千鳥ハ百子の鳥也鶯とすものうらうらうといつる但
鶯はひびくとすといふこと也 且言抄ハ百子多鶯は不苦
といふも鶯こと清秋ありはゆふよふといふもあつちる
ちをきくらふ云云或説云百千鳥と黄鸝ノ異名と
ておとがゆること不説ひる事也不可用但拾玉集ハ
慈鎮ノ哥ハ鶯ノ題とて百子多とよみりこわくろ
やうれあつそひのま事ハ正説傳受せぬ人ハ鶯とや

柳ノ衣

かやうに衣の事これ月くれ其をけ、春とともく其
名は或ハ梅或ハ柳の花秋なるとあまハ其まゝ志々
よりて大いそ是ハいさのそきゆるり此ハ四季とも
不同他准之まふ事あつハ河これ好土ハ訊一
又挑花葉葉ハ具色くまて委可見之



の酢うこりやをわくくひくなくさけりして麓の中よりの也この人てん文武天皇大寶元年はけり礼記の玉幣は菜を釋幣を奠て先師を礼すところこのねみ入てんこの後漢明帝ハ孔子宅に幸して仲尼を祀り七十二弟子を祠とて又先聖とし孔子を先師とハ顔回をといひ一は周公也先聖といひ孔子を先師といハ孔子也貞觀二年改て先聖先師といハ孔子顔回とせり又神護景雲二年孔宣父を改て文宣王とせり由弘仁格よん今大学寮よおさめなる孔子十哲の影ハ異國より渡て我朝累代の物として傳るる一公事根源 猶延喜式江次第委訓よとときまるとしとや兩度あるはれとて為正事春日祭此所よ可記之年中行事哥合

のくの一ニまを成るはれとていひつれ何とをふまつて

獻酢

必釋奠乃次の日あまは庚日よ當まつり同春秋二季よ也とて釋奠延まハ獻酢も同中庚よのくを獻すは昨日れ釋奠乃供具哉大学寮より内裏へ奉る也年中行事哥合秋哥まはりせし八月のまけとててて考ふとあつるまはりきまけハ神食こかきとやたとて神供かて成り也

春日祭

上申日 二月二十一日は先未乃日使ハ近衛の中少將はむ萬賀茂此祭の府官人摺袴着て舞人はむはるひ毎名門のまは参つて事此由を奏も舞人もの福とてはる人いそはるはるまはる當日のあつる内侍しふ若人出車奉るとて并もはる清和天皇貞觀元年十一月九日此祭ハ春日四所

温故卷二

廿六

此書てけり物もむくきれ事とてつるあは春初子日
 玉うささとりて蠶室をかきりひ祝ひしむこと
 つるおりのそ蠶養れ法ハ正月初子日午茶させ
 る女子とひの姫と稱して蠶室をかたひひ祝ひし
 ひる也次ハ二月午の日しりて蠶れ胤をかして
 暖日よあつて三月午日しりて来はけて四五
 月城まひりて時寸云云春のころひれをふのむりさ
 代事ハ五名抄袖中抄八雲御抄ハ委すもハ夏こ
 祈年祭 四日 是ハ太神宮以下三千一百廿二座の神
 とまつてせとも其取たけりたるもさ
 くよをめぐ幣をけりて諸國よも年ふひのま
 けりて終ふし周礼ハ祈年ハ豊年とてしむこと
 ことり神祇官とてとなつる弁かひてしり諸國
 のり物とてしりし物ハ白猪白鶏の物也

祈年祭

天武天皇四年二月はけりて此祭をたて祈年
 の祭月次兩度新嘗祭とハ四ヶ代祭とて國の大事
 ことり也 公事根源 拾遺 愚草 貞外上
 あま此年城のころひり物れ法をひり美 二月のころ
 年中の事并合よ
 かくてふれをたてたる代を三をせりしけり

佛別 去佛 二月別

朧月夜

三月はけりるおりのを云詞春はあはれ月夜
 といくハ春さる一 流布 霞ハ朧 二ハ嫌 新式

鐘朧

朧夜をとも云也 但二つともよ
 嫌詞ハ五言抄より

踏火燎

陽焰とて青陽ハ氣の煙のやふふゆる
 ふかきりふのゆる春日より是也

土筆

丈夫為家

さほひめい筆かこもるははしくあう紀ころる春はきり

烏芋

春也堀河百首よ

とらふとれそのふまきういともそとのれ小田まらるる

水葱摘

春也水葱が花ハ夏也
秋云説ハ非也 昌程説

椿花

只椿ハ雜也花はひすひくハ春也 流布
假令花此字
なぐても咲教白椿かうしてハ春也但白椿立言抄嫌詞也

紅梅

嫌詞也

八重梅

丈夫よの字あり
てもよめるあり

遅梅

咲よよ迄の色梅 初梅 宗砌 東坡

詩二月驚梅晚幽香此地無

待花

花苔

含泣かめくハ雲 梅のちりめ
こつり但梅よかきうう寸 藻塩

花催

花火燈 花灯

初花 花解

三月は是等の
事ハ二月も三月

初櫻

初花櫻

糸櫻

獨梅櫻

同上丈夫後
頼哥よ

あとしえきり梅は枝おや折乃糸ういすりふききり

樺櫻

古今物名よかは梅とある是也 和名集よ糸梅
こすうしり紅花なと一 細流 各カアウの梅

二月の部よ記之

歸雁

雁れ名所 別北行
雁よかこさん城ひとひくも春

鶯

渡

巢

春也吉日とちりて
巢とくふ物とちり

鳥巢

諸鳥の巢大なる春也
水鳥此巢ハ夏なり

鳥古巢

子規巢

式し三
月の部

よのする本あきこも
今こも鳥巢此次ては記之

鷓鴣

萬葉小嘗れ六に此
をうにひくも

よめり下略ハ此をうもましく嘗の巢より時鳥の目わ
成る事あるといひ父ハ郭公也母ハ嘗の父よりハ
似て母よし
似てもよめり
義春也大發句帳春部ハ周桂句
けり嘗れ巢山ヤミ井庭ハ松諸鳥の巢これ春と
あきこも是等あきこもる母とよめりハ郭公ハ巢に
ても夏又嘗の巢ハ雜に不説あるゆゆ此と記也
諸鳥此轉皆春也三月よりなる水鳥もえはるや
いり予若年此時神田天神にて連哥此席ハ

雁鳥巢

新式抄物なくも春とあり
雜に不説あり非也尋其

鳥轉

諸鳥此轉皆春也三月よりなる水鳥もえはるや
いり予若年此時神田天神にて連哥此席ハ

けりなりて多れえはるこも云ふは池を付たりぬ時
其座此人同云水鳥此えはる事ありや予云源氏
橋姫ハ池のち多もれもいりつものぞあきこも
つる多かりありこもるは口早

顔鳥

春也かやよ多かり事也
音羽山ちるなり片戀するものこもりよめり

多かり多かりといひり萬葉第十
容鳥此多かり散鳴春此野の草根の志多記悉もす
源氏物語よめり是其鳥と定款但定家不知之
と不推之只るくも多かり伊未決之
第三下河海抄花鳥餘情藻塩草をくは
此説ありといひハ雲抄抄よめり花鳥より定家
卿不弁但其花鳥となくくも多かり事
さめり多かりも多かり是非也かやりの事

行幸乃御狩の齋古山をねむし初く能く能く
されハ源政頼上代尾ニきりて白き尾をて継ぎり其
心も意もよぶ尾上乃白尾を跡番とてとてまきとす
とて深之ゆら心あつてつゝのころ御事也御門
伊不審乃時政頼哥

御代尾とて言はれぬ心まきとてつゝのころ御事也
こはりきるとは心より白尾と表継也同百首代哥よ

初あをれうすもれうらのををゆり志る尾上ハ初けり
け哥よけて或新式抄物ハ春ハかきとてえうてなふ
ゆよる代尾代二三扱白き尾とてけとてもつゝ也志るれ

猶鷹鳥飼代口傳ハ初言代心也と藻塩草もいり
初えや梅ふけきつゝさ海非代も教えてかるとり人
さ海ひつるるとハ春乃齋代惣名也 定家 三百首

仇保姫鷹

春の部此注より

わつ門代かぶら代はさささとりはさそぬきハまともれゆ

二三月は初とて小ふりさささ 同注

或ハさかひつるるとハまの初也

蝶

春ささりく代花のささり初花のちりささりの物なると
八雲御抄 梅ちりてあつとつと詩ハ丁生不得近梅花
とつり但只梅乃時分在之 藻塩草

たつひあささめ代梅も白とて初ハ梅乃ちり初の様

壬二集中ニ家隆卿ノ哥也拾遺愚草上ニ定家郷哥云

菊うれてささい蝶はえぬれささる花やあをれささる

初らささりつあめはささるハ雲津抄よかつとハか

蛙

題るとの外ハささり但後撰哥よかつとハか

櫻衣

表白裏赤花 桃花御説

表白裏紫花 三月と云

五文卷

温故目録卷第三

彌生

奉御燈北斗

三日 是ハ天子北斗ノ灯明と有りり之

峯小火と有りて北辰ノ供也云々
御記ナキも云々
今日ノ御神事ノ事云々
今ハ清灯此義ハ云々
ノ北ハ此ノ御座云々
五年ノ頃云々

曲水宴

同日 流觴

巡水宴會

曲水宴乃云々

三月三日也 是ハ云々
王云々
詩云作て講云々
溝水云々

去也周代は周公旦云々人浴邑と一ウて曲水
宴と始めたり也後幾霜とん其後幾
れうく経るると云也年以ハ星霜といふ也

己月 稜 上巳 河海抄云漢代三月上巳日百官
東流水上禊飲自魏以後用三月三日不

用上巳鄭國俗桃花水上
上以三巳稜除不祥猶委

須磨 郷 稜 上巳日 是ハ光源氏須磨れ浦は左近
乃時三月一日よいてさる己の日陰陽師

りてさるさるの舟よこしく一或人ごことせ
かろす事なり彼物くつりよんて

踏青 唐は上巳の日曲江乃かたりて都の人を
酒をのこつ青草とを遊戯する事なり

歳時記圓機活法なとよんて事文類聚は

三月三日 上踏青鞋履よりあり又圓機活法乃

一説はハ蜀人正月人今日士女遊戯謂之踏青云

桃 二月末よりさるのなれも三月三日
と宗とする之或ハ三月三日よかき

南祭 中午日 石清水臨時祭也まづ二月比より
奉行ハ差人使舞人とりさる中れ辰の日

試樂乃事とこれ試樂ハちり比ハとこまればぬ
代のよりめは必あり一試樂も調樂もいり

音樂とこのころひん心當日ハ御禊あり庭
座は使舞人けく大臣以下かき此花使舞

人の冠よさる三献とハ五献とてかさ孫がりを
の事と天曆五年四月廿七日なめては臨時代
祭ハありさるるに年將門ク乱逆れ事を
一時新ヤこれをもたハ幡大菩薩とつこの門

の首とまはり給ひきるとぬん其報賽乃ハ小臨時
の祭ともいふ其時の使ハ播磨守允明ハの朝臣
舞人ハとて十人ハ

初らるやれ其の石清乃初末とてはくはくハと
是ハ其おりれ哥よなんゆりきる志るた天禄二年
三月より毎年此事ハ成ゆる次の日ハ還立ハの

儀を南祭ハ御前よめさん弓場殿にて勸盃を
くたさたまふ 公事根源中畧 江次第六ハ有ハ二
午時ハ用ハ下ハ午ハ昔ハ南祭ハ還立ハなく賀茂ハ

乃よまき一由雲圖抄よゆりを代とこまりハ由茨
第ちとにもえさるゆ川次郎百首ハ石清水臨時
祭ハ哥云俊頼

ふりりのかさひりけなるとはおりて後ハのゆりや
南祭とするハ常の事也 男山をふりりハ祭ハ

なハして春也宗日向也正方面吟ハの
いふハひすれぬのゆ末と云句よはけり

桑子

三月午月ハめて桑よ
けり事ハ前よまハり

新桑摘

萍始生

月令ハ穀雨節ハ此氣候
也本朝ハても春なり

鎮花祭

是ハ大神ハ狹井ハの二祭とハと神祇令ハのせ
つハまハ花ハの死ハふハと疫神ハ散ハて人ハ

かや中するハかよハかまハはハるハ為ハふハ祭ハハハこハかハ神
祇官ハしてゆりハ公事根源 新拾遺第十六ハ開白前

左大臣哥云

長宗ぬるまはまはりの花志門め凡おさゆとてハけいハのハ

小弓鬻

丈木第卅二ハ慈鎮哥
秋の稻のおさゆとせれりハまハあハ心ハのハまりハ小弓

達日

とよ事ハとそく暮る事也也
事此とそ記ハあらん 新式抄

永日

弥生山

名取ハあらん 流布只
よまのふとよ事也

夏近

夏を隣

待夏

春過而

春ありぬ 春ありや 春を隣
四季よりふおなり 其季より 流布

花

一リ波一リ瀧一リ雲

上三ハ新式ハ可分別物也
可也 詞と

いりよとち従ん何乃むつ一き事ハなり 新式は
く志ゆ人ハ訊一但新式とよくちなる事ハなり

今爰ハ異説とあつて委キハ糺明タシメテして記一と記ハ

事と第一とする物ハ去嫌ハ事ハ注するに不
及四時他准之但事ハ委の千ハ事ハあり

一雪 植物可嫌之降物不 新式 一雪吹 全 一衣

一袖一被

花衣正花也植物ハ打越嫌一衣類
乃ハ本也然ハ花の袖も同前

一流布花

衣裳之色花木

不可為植物但依
其色可有其季

新式

是ハ衣裳ハ山吹色花染ナクハ季候ハ打

植也ハあらんといふ儀之無言抄云ハのふらんと

とも草木よりふその色それハ季とあらゆハ打紙

端一ハ山吹色花をわたりハ新式一ハ也

入繪ふかく草本此下は櫻と繪よすは春也紅葉
とかくハ秋をり然と冬も花もつゆふよハ地は打紙地
と云説不謂植物はあらずと奥山ユウサン乃くまきくは首
尾相遠して難決すてよと代乃宗匠宗養句は
折越よしりさふとをきて心吹色此衣を付くはゆれ
ハくハかろくもくもくもく又新式よ忍摺植物ハ
あらずとゆり是してさるる魚ハ然ハ新式乃旨紙
守へさその也を代折越地こふも新式乃文意は
ふ次但時代宗匠よまきふハ一際ありて不可
論猶さるるく當流よまきする事これなかに

一四 正花也その花櫃ハ常の事也式ハ其
時節少くは花櫃もむくもれまき流布

・籠 一花櫃はむ竹の花こまきくよあり僧ハ櫃と入
こまきくも時ハ草木乃花とつくはく勿論

正花也植物也花

ワミ同前花ハハ籠

一机 源氏繪 鈴虫たきハ
あり花こすしハ机也

又机乃脚ハ花こくたきハ機あり
凡して座ハ佛具をすすハ机

一瓶 勿論正
花也春

也植 一席 花の座也又花のちり
物也 ころも花ハハと云

心 春也
新式

正花也植物ハ折
越嫌也 流布

一心 詞 雑の部ハ委可記
ウよとりてまきあり

一姿 植物也正花也但句非よと云
ハハハ流布 姿ハ花も春と云

一顔 同
前

一面 同後撰ハ花のちりハ
あざらふと云るまきあり

一貌 一伴

一眉 一土

一少友

一都

正花よなきハ
ハ説ハハと代

くくーそれいなりううて筆とくひくびうらよも其う
ちもくくううう幸一ののめきも師説とすなりけ
やが用事也又後生れ童蒙乃たどけ又ハ花月名
の詞の去場よなりううく自余此事とさうすへまう
可為植物 新式 春也 催馬樂乃くくひもの
小人 花人なりく云んやひたなるん也 暉麗なる
へと藥くう詞也新式抄物よくくひ物ありて梅の
あうりよめくくく人とも梅人といりううふありと五入
くくひ物よあり
一回 可為植物 新式
梅回くくくとのありと梅のくくく太山梅此事とすまら
是ハ宗碩の宗祇の問きをれいけりくく返答せられ
とく四れ梅多とハ一本ハ生せぬ物なり其くく梅おほく
くくくくこれ事也回よ七句嫌梅二本此内 新式抄

櫻

万葉十二九
わひきめ心梅とあをくくくくくくくくくくく
一戸 梅はまきくくくくくくくくくくくくくくく
袖中抄 新式
またの戸抄の戸松の戸かきくくくくくくくくく
よあ方可嫌之と人植物居所と小嫌也 一言抄 一駄
梅はかきくくくくくくくくくくくくくくくくくく
梅はかりはかりとあおわくくくくくくくくくくく
さうくわりのハ梅と梅とくくくくくくくくくくく
と云く麻くくくくくくくくくくくくくくくくくく
哥れ詞よくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
抄略 記之抄さくくくくくくくくくくくくくくく
正説ありくくく唯梅をかきくくくくくくくくく
後下可定之 春よくくくくくくくくくくくくく
雲伝抄 袖中抄 春 遅 春也 流布 晚櫻 春

利木花

躑躅

木也 新式 羊誤人良之躑躅
而死故以名之 順倭名

馬醉木花

馬人良此葉則醉故馬醉木 堀河百首
後賴

よりけなけ玉回接ぎてふち約はしくけよあせと花さく
なすもろもも心やけさく花さくの字なきても新
撰六帖光俊

柿ささるいこもれ心のけさく花さくも心たれさくあり耶

木の花

万葉九 園のすしれ花さくはよちさくこれのまもこのさく
なすもろもも花れさくは似由ちり

今法

不登内ト 里人やも葉けしんもはけりこも今いさくねさく
知家

信實

今より本のめとまはさくはけり河原よそりと人やあん
孫光俊やいぬさのまはさくさく紫よのまて人ありさく

新撰六帖の哥也堀河次即百首後賴哥又純回
家集なすもろ哥宗因

云云三月ころ此景物可然也

桐花

文集ニ云答桐花詩花葉青今月令清明
節桐始華云本朝四月比咲もいり

款冬

實多比物也後拾遺
七重八重花はさけも心次のまはさくさくさかめ

藤

草也 新式 惣別
かつら草用也
壺倭名 飛香舍在弘徽殿北順
云言抄云藤壺

梨壺と小雑也といひ萩殿を以て杖の事は不
小雑なる事不審なりと云ふは槌乃重日よのす
と云ふは道に定むるは方と可守事なれは
是れは又梨壺かよ花かきすは春の事
梅は桐はかの匠はと昌程へ尋其儀梅は
是れは春也梨壺は桐つが雑也といひ梨壺は桐つ
もあつたは季也云云 吾言抄は前つが雑也
のすといひかきる文言は新式今案はもつたは式目
の事やわづらひは當時春は治定寸梅は桐前

莖菜

茅花

ハ雲のハちむれとありちのぬれ同 事也
茅花は浅茅之原乃都保莖今盛有吾戀答波

新撰六帖知家

菴蘆子摘

菴蘆子摘 是れは後頼家集あり

若和布

粟蒔

紹巴千句よこころくはゆけりあはれさ云のハ春あり
夏はハなりやそとくは夏れり云と云ふ或説ふ
云花圃よあつぬまハ無名種まきこ云ハ稲の事
其外萬此種まきも大く春也粟まきハ五月也刈は
八月也云也紹巴代句ハ合り夏也云今按
云然者可隨所好但先達ハ懐紙と
云ふハ似たり其まき春部ハ注之

